令和６年度　宮崎公立大学　学校推薦型選抜Ｉ　小論文課題

次の文章を読み、ＡＩ（人工知能）に代表されるテクノロジーの進化について問題点と可能性を整理した上で、進化し続けるテクノロジーに私たちはどのように向き合っていくべきか、あなたの意見を 600 字程度で述べなさい。

「まさか医者がＡＩに惨敗するなんて」。米南部テネシー州に帰省中だった医師のデイビー・スミスさんは１月、同僚の電子メールを読んでがくぜんとした。

スミスさんらは生成ＡＩ「Ｃｈａｔ（チャット）ＧＰＴ」と医師に同じ質問をなげかけ、どちらが優れた回答をするかを調べた。専門家らが下した判定は「ＡＩの圧勝」。情報の質の高さを示す指標は３．６倍、共感力は約１０倍の差がついた。

〈それはとてもお気の毒でしたね。きれいな水で目頭から目尻まで優しく洗いましょう。痛みや充血があれば医師の診察を受けてくださいね〉。「漂白剤が目に入った」という相談に、ＡＩの回答はいたわりの言葉から始まる。淡々と説明する医師とは対照的だった。

ＡＩは疲れることもいらだつこともない。待ち時間なく診察を受けられるなら患者にはいいことずくめだ。ただ便利さと引き換えに、専門教育を受けた医師もＡＩが代替する未来がちらつく。米ゴールドマン・サックスは事務や法務など米国の仕事の４分の１が将来自動化されると予測する。

４０億年前に誕生した生命は、栄華と衰退を繰り返してきた。６６００万年前の恐竜絶滅を経て、３０万年前に姿を現したホモ・サピエンスが地上の覇者となった。だが人類がいま直面するのは、ヒトの能力をはるかに超えて地球の命運を揺るがすテクノロジーの奔流だ。

「地球を冷やす」。米新興企業メーク・サンセッツは２月、米西部ネバダ州で二酸化硫黄（SO_2）を運ぶ気球を打ち上げた。上空に散布し、太陽光を反射して地球温暖化を防ぐという。SO_2がつくる１グラムの雲の粒は１トンの二酸化炭素（CO_2）がもたらす温暖化の影響を相殺すると主張する。

惑星の環境を改変する神の領域にも近い技術だが、大気汚染や災害を引き起こす恐れもある。科学者の間で「新たなリスクをもたらす」と否定的な声は多い。

テクノロジーは敵か味方か。産業革命に沸く１９世紀の大英帝国では、失業を恐れた労働者が機械を打ち壊す「ラッダイト運動」が起きた。政府は軍を動員して暴動を鎮め、国力の礎を築いた。

それから約２００年。テクノロジーが社会に与える衝撃は当時の機械とは比べものにならない。

ＡＩによる人類絶滅のリスクは核戦争に匹敵する――。ＡＩ研究の大家ジェフリー・ヒントン氏ら３５０人超は５月末、共同声明に署名した。

声明をまとめた団体は、ＡＩがもたらすリスクの一つに「衰弱」を挙げる。重要な判断を機械に託すようになると、人間は知識やスキルを得る動機が減る。いずれ人類は衰え、自治能力を失う恐れがあると警告する。

一方、米マッキンゼー・アンド・カンパニーは６月、生成ＡＩが年最大４．４兆ドル（約６３０兆円）の経済価値をもたらすと試算した。先端技術への評価が割れるなか、社会は変革を迫られる。

「１０年もすれば人間の男性の細胞からも卵子がつくれる」。林克彦大阪大教授は２匹のオスのネズミから子供をつくる実験に成功した。

カギになったのは２００６年に山中伸弥京都大教授が作製に成功したｉＰＳ細胞だ。オスの尾からｉＰＳ細胞を育て、オスの性をつかさどる染色体を消し卵子に変えた。別のオスの精子を受精してメスの子宮に入れると健康な子供が生まれた。

どんな細胞でも時計の針を巻き戻し、性別の壁もやすやすと越える。同性カップルの子供や自分のクローンすら実現可能だ。家族を巡る社会制度が矛盾を来す日も近い。

テクノロジーは人間の欲望をかなえる魔法の道具だった。イスラエルのワイツマン科学研究所によると人類が生み出した人工物の重さは、地球上の全生物の総量に匹敵するまでに増えた。「人類の時代」を意味する新たな地質年代「人新世」を設ける議論が進む。

ただ破壊的なイノベーションはヒトの限界を踏み越える。人類に代わりテクノロジーが覇権を握る「テクノ新世」の到来も予感させる。技術を脅威とみなすか、それとも共生を探るか。人類は地球史の分岐点に立つ。

（出典：テクノ新世『日本経済新聞』電子版２０２３年６月２６日）